

佳作

## 忘れた消しゴム

福島県 いわき市立御厩小学校六年 影山 菜々実

私のクラスメイトのある子を、私は好きではありませんでした。あんまりクラスのみんなと話さないし、軽く先生に注意されただけで泣いてしまうからです。でも、その子は本当はすごく優しい子だと分かり、その子が好きになりました。

五年生の三学期の後半、もうすぐ五年生が終わる、その時私のクラスではその日、ある教科のテストがありました。もうすぐテストなので、えん筆と消しゴムを出そうと筆箱の中を見ました。すると、筆箱のすみずみまで探しても、消しゴムが見つかりません。今日は一校時目からテストなのに、消しゴムを忘れてしまいました。先生もその時はいなかったの、だれかに借りるしかありませんでした。その時前の席にいたその子に「消しゴム二つ持ってない。」

と、聞いてみました。すると

「ううん、持ってないよ。」

と言い、首を横にふりました。私は

「そっか、ごめんね。」

と言い、先生が来るまで待つことにしました。でも、その子が私の方を向いて

「はい。」

と、消しゴムをわたしてきました。さっき一つしか持っていないと言っていたのに、どうやって貸してくれたのかな、と思い、

「消しゴム二つ持ってたの。」

と、聞いてみました。すると

「ううん。自分の消しゴムを二つに切っただけだよ。」と言いました。私はわざわざ一つの消しゴムを二つに切ってくれたその優しさにおどろきました。私は今までその子をきらっていたことに、「何でこんなに優しい人をきらっていたんだろう」と、今の今までの自分をどなりつけたくなる程はさしくありませんでした。そして、その時学びました。あまり好きではない人も、正面からちゃんと話せばその人の良い所が必ず見つけられることを。そして、私もその子位優しくなりたいたいと思いました。

私はいつも少ししか話していないのにその人を好きかきらいか判断してしまいます。でも、今回のことから、苦手な人も、良い所を一つでも見つければ好きになれるという事が良く分かりました。これからはもっと色々な人とたくさん話し、一人一人の良い所を見つけよう、そう思いました。